

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

静岡





日本作文の会 編

日本の 子どもの詩

静岡



岩崎書店

日本作文の会
日本の子どもの詩 22
岩崎書店 昭58
110 p 21cm
内容：22 静岡
〔分〕 911

日本の子どもの詩 22 静岡

一九八三年二月二五日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話(〇三)八二二・九一三(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ゼンたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などもよばれ、世界にもまねなものです。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたのですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの『わらべうた』）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「静岡編」であります。どうぞ、ひとつひとつといねいにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

8

吹雪の夜

小さな父さん

豆腐

ユキ

9

松の林

日和

アラシ

小づかい

10

ぼうくうえんしゅう

兄さん

11

母

えんそく

父

ヘイタイオクリ

12

踏切

オマツリ

けんか

13

ゆから出て

14

茶部屋の夜

働く人

カゼ

15

ひばり

田草取り

カエルツリ

16

麦播

夜の子守

麦畑の耕作

17

アッカダマシ(子もり)

静かな夜

18

あい

オトウト

洗濯

19

海人草

小使いさん

サンジュツノ時

20

にわとり

ひよこ

トウカイジドウシヤ

21

キシヤ

停車場のひこうき

燈火管制

22

芹澤さん

しょうじ

春

32	31	30	29	28		26	25	24	23												
さかなとり	町	子うしのまつ毛	ぼくの命	おなじ人間なのに	昔の人と今の人	テスト	川の神さん	サイドカー	はりだされたずが	ちゅうしゃ	おたまじゃくし	おてつだい		馬のきやあば切り	お店	ぜに	馬	兵隊さん	雨ふるな	父	お月さん
													1945 ～ 1959								



33	あめ
34	ふき
34	お茶つみ
35	うらのはたけ
35	おかあちゃんのおっぱい
36	父
36	田植え
37	橋の工事場
37	雨の日
38	ばった
38	土方
39	とろっこ
39	かきのづく
40	はくらのたんけんたい
40	山の帰り
41	いねこき
41	いも
42	ちようの標本
42	十五夜
43	菊
43	祭の宵
44	おかあさん
45	こもり
45	けんか
45	軍鑑
45	麦ふみ

46

働く人

こもり

どんどんやき

47

元日の朝

48

天保

山のふもとの家

49

内職

むく犬

50

線路

51

鶏

嵐の去った朝



1960
~
1969

54

しりもち

ねこやなぎ

わらびとり

55

パワーシャベル

おかあさんのいねむり

56

オートバイ

おじいちゃん

57

夜中に働く母

まきわり

58

心

59

たいようのはなし

おられたひまわり

60

あまがえる

かみなり

61

とうみ

タンブリング

62

草取り

豚

63

茶畑で

夏の夜

64

お茶もみ

65

おかあさんのまくら

リヤカーのあととし

66

目がまわる

お月さん

67

ぼくは百姓の子だ

夕方の川

68

あし

69

牛乳―脱脂粉乳―

トンボの産卵

70

手伝い

草の想い

71

ゆき

だいこんづけ

72

赤ちゃんがほしい

たくあんづけ

74 73
おかあさんの手
ぞうせん所のお

おかあさんの手
ぞうせん所のおとうさん

しんけんな心

利己主義者

76
ジェット機

キング牧師

化石

78 矛盾の世の中



2

80
せんせい

サイン

ちっ
ちや
な
たん
ぽ
ぽ

81
おばあちゃんがしんだ

82
おかあさん

父のバス

83
大さんしょう魚

なおき君のつくえ

84 女の子

85
第五福龍丸

鐵棒

86
受驗勉強

おとうさん

87
雨

がんばれ
さなぎ

あじさい

あさま山そのの赤ぐんは

89
十三メートル泳げた

きんもくせい

行ってしまった夏

91
調理士

父の形見

夕やけぞら

93
足

ねしょんべん

94
下着

理恵ちゃん

95
おかあさん

足あと

96
母

川

天城秋のスケッチ

おいかけごっこ

あね

99
うしんべの子

ブルドーザー

まつり

道路工事の人

102
かあさんの手

110 107

あとがき——静岡県の子童詩指導の歩み
この本の編集をした人たち

105

二千メートル

104

夕焼け
パチンコ

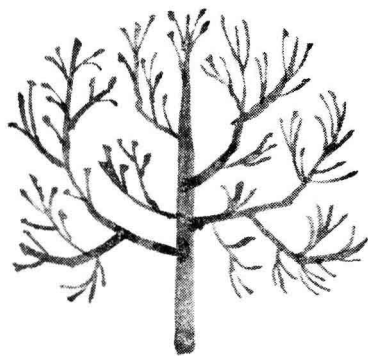
103

けっこん写真

先生の右手

*





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

ここには、みなさんにとって、
祖父母にあたる人たちの子ども
ころの詩が初めにのせられている。

日本の多くの子どもたちが詩を
書きはじめたころ、静岡にもりっ
ばな詩を書く子どもが多かった。

生活はけっして豊かなものでは
なかったが、自然や社会や人間と
の息きづかいが詩のなから伝わ
ってくる。

しかし、後半の詩になると子ど
もの上にも戦争がおおきくしか
かり、それとともに詩もおとろえ
てしまった。

そうした時代の静岡の子の詩が
ならんでいる。

吹雪ふぶきの夜

萩野喜太郎 小6

雌鹿めしか煮る夜でありました。
みんなでいろりにすわりこみ、
みんなで話をしていてと、
吹雪がこんこんふって来た。
雌鹿煮る夜でありました。

田方郡中大見校

小さな父さん

小川義夫 高2

小さな頭に、
大きな帽子ぼうし。
小さな(めめ)お目に、
大きな眼鏡めがね。
小さな(てて)お手に、
大きなステッキ。
小さな足(あし)に、

8

大きなお靴くつ。

小さな父さん万歳ばんざい。

田方郡中大見校

豆腐とうふ

小川義夫 高2

一町行ったら、
左の角がこわれた。
二町行ったら、
右の角がこわれた。
三町目には、
横町の犬に追っかけられて、
四角な豆腐グチャグチャ。

田方郡中大見校

ユキ

戸栗くめよ 小1

ユキハ天カラ大ゼイデ
オハナシシナガラ
オチテクル。

東郡原里校

松の林

小林徳三郎 高3

松の林を通ると、
夕日で松の樹が、
半分ずつ明るくなっている。
そして歩くたびに、

松の樹の間から、

弱い日光がさして、

ちらちらする。

蟬が急に鳴きだした。

富士郡加島校

日和

斎藤恒雄 高2

甘藍^{かんらん(キャベツ)}の葉が、

日なたの方を向いて、

光っているよ。

よい日和だよ。

賀茂郡上河津校

アラシ

永好千鶴子 小2

アラシガキタ。

タンボハウミノヨウダ

イネノクビダケガミエル。

沼津市第二校(指導)杉浦力

小づかい

望月宗一 小4

学校からとんできた、

かばんをおさえてきた、

ぜにをいくらくれるかなあといいながら来た。

まくが風にふかれて

たくさんに見える。

新道の道に

赤い色 青い色

にぎやかだった。

家へかえって見たら、

母がまっかいとおをして

空をながめていた。

空はあおざめていた。

「家にはぜにがないから 十銭くれる」

僕はじつと

じめじめした土をみていた。

母もなきそうだ。

なにかかんがえてた。

由比郡北田校(指導)平田秀夫

ぼうくうえんしゅう

蘆沢 淳 小 4

10

しづお君も出てきた。

「すごいなあ」と、でると一しよにいった。

こうしゃほうの音

「どおん」となった。

きらきら光ってみえる波

じぞうさんのかわらも

てかてかだ。

由比郡北田校(指導)平田秀夫

兄さん

小栗いさゑ 小 6

朝晩涼すずしくなった、

秋田の兄さんから

鋸のこぎり持つ手が冷つめたいて

手紙が来た。

冬になるとあかぎれのきれる

かさかさした兄さんの手が

見えるようだ。

浜名郡豊西校(指導)小笠原貞雄

こんやはどうわ会だ。

忠吉君と二人で表へ出た。

興津の山、ひるのようだ。

清水の方

電きをけやしてまっくろだ。

あじをかの家のかわら

たんしようとうでひかる。

忠吉君が「すごいなあ」といった。

母

徳増栄一 小5

おっかあは病気でねているだ。
もうじき百日になる。

いしやを呼んでみてもらったりしるに
いつズックを買ってくれるかな。

上の山を白い雲がまって行く。
^(ぬ)のくとそうな雲だ。

あんなおふとんにねせてやれんかな。

浜名郡村櫛校(指導)中村千七

えんそく

伊藤よし子 小2

えんそくに

あべ川へいった。

二年ばつかでいった。

草のはえてる土手に

ルンペンがねていた。

静岡市森下校(指導)森谷弘

父

俎馬富士男 小6

お父ったんが
わらをきっている。

かたい黒い手だ。

やっぱり百姓のお父ったんだ。
^{ひやくしやう}

おれもああなるだかなあ

戸ぶくろのところであ考えた。

賀茂郡下河津校(指導)加藤武夫

ヘイタイオクリ

野口たつ子 小2

オバアチャント、

ヘイタイサン

オクリニイッタ。

メイシマイテ、

ハシッテイッタ。

「バンザイ」

ミンナガイッタ。

ハタノオト

ビラビラシタ。

静岡市森下校(指導)森谷弘

踏みきり
踏切

加藤チハル 小4

いつも、遠足は

おかあちゃんがしたくしてくれたが

今年の遠足は、

おじいちゃんが

みんなしたくをしてくれました。

学校へ来ると、

みんなうれしそうに

リックサックをしょっています。

私たちが先頭で落合橋を渡った。

線路へ来た。

後の方の人は楽しそうに話している

線路のれえるが光っている。

お母ちゃんは汽車に乗って、

ここを通って、

満州へ行ったのです。

れえるの光っているところを見ると

私の顔と青空がはっきりみえます。

そしてお母さんの顔もみえて来ました。

駿東郡小山第一校(指導)岩田栄次郎

オマツリ

清水久雄 小1

ナカゼンジノオマツリ、

ボク マチカネル。

キョウモオツカサニキイテ、

ボクノタメタゼニ

イゼツテミタ。

浜名郡豊西校(指導)小笠原貞雄

けんか

池田恵美子 小6

弟とふとんの上でけんかした

弟を幾度かなげた私も少しひどくなつて来た

「二人共しようちせんぞ」と母の声

私は考えた（よそうけんかは）

私は思い切つてふとんの中へ入った

弟のげんこつが頭にふる

だけど私はじつとがまんしていた

弟も張合いがなく寝た様子

私の目からはボタリボタリと

熱い涙がふとんの上におちた

弟の下になつてゐる姉が何処どこにあらう

そう思う自分が情なくなつた

弟がにくらしい

弟の寝顔をじつとにらめた

もういびきをかいて寝ている

いびきが一層にくらしい

あれきり母は一語も言わない

カチカチと聞える時計の音

静かになつたなあ

私は静かに目をとじた

榛原郡氷川校

ゆから出て

谷口経子 小6

ゆから出た。

一日中今日は掃除した。

体がぐったりした気持、

手も足もきれいにひやけたようだ。

体から

ぽっぽっゆげが出ている。

父の体も

ゆげが体の見えないように立っている。

ゆに入ると体がちがつたような気持がする。

父は、一日中のくたびれがぬけるようだ、

と言ひ言ひ

体をふいている。

私もいい気持になつて

一人で目がふさがりそうだ。

志太郡大富校（指導）飯田政一

茶部屋の夜

浦田くら 小6

夜になった。

牛小屋にさしこむ青い月の光。

まだ父は隣の茶部屋で茶をとたりもんでいる。

夜風が涼しい。

もうやめればいいのに、

汗ばんだ顔は大分つかれたようだ。

背中の妹はすやすやねむっている。

月はだんだん高くなった。

安倍郡玉川校(指導)志村 實

働く人

鈴木満寿司 小4

くらの前へ行った。

くらの中から、

かんかんという音、

しゅうしゅうと言う音が聞こえてくる。

14

その中に、

お父さんはオートバイで、

ぜにをとりに行く。

僕はくらの中へ入る。

油くさい。

くらの中にかんがたくさん入っていた。

かんをたたく音がかんかんとひびく。

かんにあながあいている所を、

はんだでくつつけていた。

二人は一生けんめいに働いている。

あせが出るたびにてぬぐいでふく。

小さなまどから、

入るうすい光が

二人の顔を静かにてらしていた。

志太郡青島校(指導)高木 幸奈

カゼ

サトウナガコ 小1

カラツカゼガフクト、

デンシンバシラガ